

寶相華

年頭所感

会長 小山新造

(昭36年卒)



まだまだと思っております。創立九〇周年事業も昨年十一月三日の記念式典・祝賀会で無事に終えることができました。

あとは、記念誌の発刊を待つばかりとなりました。

生徒達を主体としたさまざまな記念行事が挙行され、想い出に残る年になったと思います。

ミュージカル「ライオンキング」の鑑賞、SSP記念講演、記念図書披露、ロゴ・キャッチフレーズ表彰、鴻ノ池陸上競技場での体育大会、なら100年会館での記念式典、活躍する奈高OBのポスター展、日本マイククロソフト(株)樋口社長の記念講演、ホテル日航奈良での祝賀会と、どれをとっても緻密に計画をされてすばらしい行事となりました。

これは、生徒達と先生方、そしてPTAと宝相華会が一つになって努力してきたおかげと喜んでおります。

宝相華会 (同窓会) 会報 No. 69

発行者 小山新造
編集者 藤原正義
発行所 県立奈良高校同窓会
印刷所 共同精版印刷 KK

題字「寶相華」は天平時代の国宝「細字金光明最勝王経」より。(筒井寛秀((中11回))収録)

次は私共の目指すところは、一〇〇周年をどう迎えるかであります。今から色々な方にご意見を聞きながら、他校の状況や時代の流れを考え、我が奈良高校にとって何が必要なのか、どうする事が一番なのかを良く考え、また逆に宝相華会としてどこまでやれば良いのか、どこまで出来るのかを検討する必要があります。また、前から申し上げております役員の変更であります。高年齢や遠隔地の為、なかなか出席が出来ないので退任したいとお申し出が増えております。一〇〇周年に向け今現在活躍されている方にもお願いをしてお力を借りたいという気持ちもありません。この節目に実行させていただきます。

そして、今年卒業される生徒の皆さんにお願いしたいことは、皆さん方は卒業と同時に自動的に宝相華会に入会となりますので、ぜひ我々と一緒になって母校の為に、そして在校生の為に色々と応援できる様、力を蓄えていただきたいと思えます。その為には社会人になられても勤務地に依りて、奈良・大阪・東京にありませぬ宝相華会のどこかの支部に籍を置いていただいで、積極的に参加、ご協力をいただけることを願っています。それによって、先輩方がどのようにして皆様方を支え、色々とご尽力されておられたのかという事を理解していただけると思っています。

平成26年度 宝相華会総会

旧奈良中学・旧市立高女・奈良高校同窓会

日 時 平成26年4月13日(日)
場 所 ホテル日航奈良(JR奈良駅西側)
総 会 午前10時～
記念講演 10時50分～

「清酒の発祥」

講師 大西弘信(高47年卒)
(正暦寺住職)

パーティー 12時～
会 費

5,000円(当日受付で載きます。)
但し、新入会員(本年度卒業生)無料。
平成21年以降の卒業生3,000円

いじめっやじ

学校長 小林 勢 治



春の訪れを告げる梅の花が色づきはじめ、人々の動きにも活気が感じられる季節となつてまいりました。宝相華会の皆様には、ますますご健勝にてご活躍のこととお慶び申し上げます。

さて、平成二十五年度も残り少なくなつてまいりましたが、この一年を振り返るとやはり本校創立九〇周年記念事業を滞りなく遂行できたことに尽きるのではないかと存じます。

私は昨年発行の本紙の中で「記念事業の一つひとつを立派に実行することは勿論ですが、それらの記念事業を通

して、あるいはこの佳節を契機として、在校生に奈高生としての自覚と誇りを強く認識させたい」と校長としての決意を述べさせていただきました。そのために全ての記念事業の企画・計画・運営に生徒を参画させ、「生徒たちによる生徒たちのための記念事業にしよう」と呼びかけてきたところではあります。

幸いにも宝相華会役員の皆様には私ども学校の趣旨を快くご理解いただき、さらに物心両面にわたって多大のご援助をいただきながら、当初の計画どおり諸事業を滞りなく実行させていただくことができました。そのなかで生徒たちにはと言いますと、これまでにない試みとして「生徒実行委員会」を自主的に立ち上げ、時には事業運営の全てを担ったり、時には広報活動やサ

ポーターとして活躍したりしながら全ての事業に関わってくれたのであります。とりわけ十一月三日に開催いたしました記念式典では、生徒実行委員会、ハンドボール部、放送部などの生徒たちが会場外での案内・受付・誘導から式典の進行に至るまでの大役を立派に果たし、式典を盛り上げる音楽演奏には吹奏楽部、ギター・マンドリン部、コーラス部、箏曲部、軽音楽部の生徒たちが参加して華やかさを演出するなど、まさに生徒たちの手によって厳粛ななかにも心温まる記念式を挙行することができたのであります。

もちろん、司会進行をお引き受けいただいた朝日放送の三代澤康司様、愛媛朝日テレビの坂口愛美様、素晴らしいチェロ演奏を披露いただいた伊藤裕様、美しい歌声を聴かせていただいた花房英里子様、そして貴重な記念講演をいただいた日本マイクソフト社社長の樋口泰行様はじめ数多くの卒業生の皆様のお力を頂いて素晴らしい式典となったことは言うまでもな

く、ご協力を賜りました皆様方に紙面をお借りして改めて厚くお礼申し上げます。

ところで、記念式典を終えた十一月末に生徒を対象としたアンケートを実施し、記念事業に対する生徒たちの反応を調査いたしました。その結果、「九〇周年の年に奈高生でいられて良かった」「凄い先輩がおられることに驚いた」「奈良高校を誇りに思う」といった意見が大半を占め、記念事業の当初の目的である

「奈良高校生としての自覚と誇り」を多くの生徒が胸に刻みこんでくれたものと嬉しく思っております。

さて、今年はいよいよ創立一〇〇周年に向かって奈良高校が前進を始める年となります。課題多きこれからの十年ではございますが、奈良高校の更なる発展を期して教職員一丸となって努力してまいり所存でございます。宝相華会の皆様には、どうかこれまでも増して母校へのご支援を宜しくお願い申し上げます。

創立九〇周年記念事業について

教諭 中尾 考 周

前号で航空写真撮影までの報告をさせていただきましたが、ご覧になっていない会員様もいらっしゃると思います。再度掲載し九〇周年事業報告とさせていただきます。

創立九〇周年記念事業内容について、今回、企画を担当

させていたいております中尾がご報告させていただきます。過去を振り返りますと、創立六〇周年では新図書館を、七〇周年ではセミナーハウス（同窓会会館）、八〇周年ではクラブハウス（パラフォーラ）を周年記念事業の一環として会員の皆様より多

額のご寄付をいただき後輩のために建てていただきました。そして、九〇周年です。ご存じの通り、本校の校舎は古く、狭い敷地に新たに建物を建てても手狭になることは間違いありません。来る一〇〇周年の際には耐震化のための大規模改修後で、新たな建物を計画されるであろうという理由から、今回は在校生にしている生徒の心に残る周年事業にしようと学校で方針を決めました。そこで生徒実行委員会を組織し、生徒にも自分たちの希望を反映させることができるよう計画して参りました。

まず、昨年ロゴマークを生徒より募集し、谷 有香子さん（現三年）が「九〇年の確たる伝統を持つ奈良高校の伝統を基盤にし、その伝統を引き継ぎこれからも上へ上へと成長していく奈高生」をイメージして考案してくれました。スローガンは総務委員会が考案して、左官伽奈子さん（現三年）が毛筆で書いてくれました。これらを、学校内の文書や封筒に使い、横断幕も作成しました。

今年度になり、記念事業の第一弾が航空写真撮影です。五月二十日（月）中間考査の最中でしたが、全校生徒が人文字を作り、それを無人のヘリで撮影するというものです。奈良高校が人文字を作ったのは、航空写真撮影というのは、野球部の選抜大会に出場を記念して以来です。およそ二十年ぶりとなります。人文字の図案は松井百々さん（現二年）がロゴマークを生かして考案してくれました。冬の制服着用での撮影で大変暑かったですが、事前に生徒実行委員が各クラスの生徒に自分たちの位置を指示していたこともあり、約三十分で配置が完了しました。人文字の写真を使って、九〇周年の記念品としてクリアファイルや二種類作成し、生徒に配布もしました。

次に劇団四季のライオンキング鑑賞です。生徒の心に残る本物の芸術を見せてあげようという思いから実現しました。大阪の四季劇場は千席余りしかなく、全校生徒が同じ日に鑑賞できないため、九月二十日（金）に一年生は一般の来場者と一緒での鑑賞になりました。九月二十七日（金）は全館貸し切り、一、二、三年生と育友会・同窓会のご希望なされた方で鑑賞しました。事前に生徒実行委員会より、ライオンキングのストーリー紹介やミュージカル鑑賞のマナーを書いたチラシを配っていたため、マナーよく鑑賞し楽しんでくれました。特に最後のカーテンコールでは、生徒達の大きな拍手のおかげで、通常よりも多くの回数のカーテンコールが行われました。

十月四日（金）は普段お話をなかなか聞くことができない方をお呼びすることができました。SSH校である特徴を生かし、SSP特別講演会として「はやぶさ」プロジェクトを担った技術者の、日本電気宇宙システム 小笠原雅弘氏にご講演を頂きました。最初から体育館を真っ暗にして、宇宙をイメージしながらの講演は、まさに宇宙を旅しているようでした。順調ではなかったプロジェクトの苦労話やそれを乗り越えるためのチーム力など間で仕事をさされた方でないといけないよな話に、全校生徒・教員が引きつけられていました。この講演をきっかけに、将来宇宙開発に携わる道を目指すと話している生徒もいました。

講演後、九〇周年記念事業で図書館に書架と本を寄贈頂いた披露を行いました。本年度より奈良県の全高等学校で総合的な学習の時間として、奈良に関することを探求する奈良TIMEというものが導入されました。従来からも奈良に関する本が図書館にありましたが、より充実させるため、書架と共に購入させて頂きました。現在これらの本を利用して、探求成果の発表に向けて準備しています。また、この九〇周年記念事業の様々なシーンで用いているロゴマーク考案者の谷さん、スローガンの題字の左官さんの表彰がありました。最後に、昭和58年度の先輩方より記念図書寄贈の披露がありました。（別記事参照のこと）

十月八日（火）には鴻ノ池陸上競技場における九〇周年記念体育大会を行いました。今年例年になく台風が多く発生した年で、一週間前より日本近海には二つの台風があり心配しましたが、生徒たちの強い願いが通じたのか、日本列島を避けてくれました。広いフィールドでの開催であるため、効果的な音響が必要と判断し、(株)TAC様のご協力を得ました。暑くも寒くもない絶好のコンディションの下、全クラス整然と入場行進を行いました。千二百名の隊列を乱さぬ行進は圧巻でした。その後開会行事を行い、



ゲストの紹介を行いました。TACの音響とともに、実況、インタビュアーをドラマチックナインで知られている永井康之氏をお呼びしました。生徒の大きな歓声で登場された永井氏は、軽快な口調で早くも生徒の心をつかんでおられました。そのような中で百メートル競走、ジャベリックスローが始まりました。フィールドとトラック同時に競技を行いました。放送局と永井氏のうまいナレーションのおかげで、どちらの競技にもスポットを当てることができました。生徒実行委員会でも種目を決定しましたが、是非にという声から走り幅跳びを初めて取り入れられました。盛り上がるか心配でしたが、オリンピック選手並みの、試行前の拍手を求めるパフォーマンスがあり大いに盛り上がりました。他にも九〇周年にちなんで、九十秒間にクラス全員で大縄跳びを何回跳べるかを競う九〇周年 Jump を行いました。そして最後は四百メートルリレーです。クラスの応援を背に受け、代表四名が競い

ました。本校のトラックは二百メートルでカーブが急なため、せつかく先頭を走っていても転倒という残念な結果がしばしば起こっていました。今回は一学年ずつ十クラスが同時に競え、本格的なトラックで伸び伸びと走っていました。応援も熱を帯びていました。一日はあつという間に終わり、あとは記念式典を残すのみとなりました。十一月三日(土)、なら100周年記念事業が天気に恵まれていきましたが、今回初めて雨となりました。早朝から生徒実行委員、総務委員、ハンドボール部の生徒が、この日のために生徒たちの声で作成したスタッフジャンパーを着用しそれぞれの役割を果たしてくれました。ハンドボール部の生徒は、雨の中JR奈良駅から100年会館にお越しになる方々への案内を兼ねてあいさつ運動を行ってくれました。また、生徒実行委員、総務委員は来賓の方々の受付と誘導を担当してくれました。どの生徒もにこやかにお客様をお

迎えし、曇天であることを忘れさせてくれました。何よりもよく頑張ってくれたのは、前日よりのリハーサル、そして当日式典を盛り上げてくれた、吹奏楽部、ギターマンドリン部、コーラス部、邦楽部、軽音楽部の音楽系クラブと、司会等を行ってくれた放送局です。少ししか発表してもらった時間がとれなかったにもかかわらず、丸二日間式典のために時間を費やしてくれました。ほんとうに心から感謝しています。

吹奏楽部のファンファーレとともに記念式典の幕が切つて落とされ、生徒実行委員会代表の吉川朋宏君の開会宣言からセレモニーが始まりました。「この10年のあゆみ」では、写真部員が夏より各クラブの練習風景を撮影したスライド、旧総務委員長坂口愛美さんのインタビュアー、チェロの演奏をしてくれた伊東 裕くん、声楽の花房英里子さんと続き式典は大いに盛り上がりました。そして記念講演として日本マイクロソフト(株)代表執行役社長の樋口泰行氏に

お話いただきました。樋口氏には三年前に奈良で講演された時以来、是非本校の九〇周年記念式典で後輩に語って欲しいとお願ひしていました。例年十一月に世界的な会議に出席しなければいけないので、確約は半年前にならないとできないとおっしゃいましたが、例え記念式典の時にお越し頂けなくても、日を改めて是非にという思いでお願いしました。運も味方して、記念式典にお越し頂けました。高校時代、大学時代、MBA取得の話、松下電工時代、ダイエー時代そして現職であるマイクロソフト社でのことを



ユーモアを交えてわかりやすく語ってくださいました。どの生徒にも将来への希望につながったのではないかと思います。講演がおわり、閉会行事に移ります。本校には、創立七〇周年の「奈高賛歌」、八〇周年の「ファンファーレ」という生徒が作詞、作曲し、今も親しまれている名曲があります。そのため、今回は音楽を募集する予定がありませんでした。しかし、生徒実行委員会のこの九〇周年でも音楽を残したいとの声により、応援歌を作ることになりました。もともと、本校には応援歌があり、親しんでいらした先輩方もおられると思います。最近は全く歌われておらず、今の生徒たちが野球応援の際にもみんな歌える歌をということで作りました。題も奈高応援歌「Infinity」としました。作詞は奥 一貴くん、作曲は箕浦 零くん、東田達哉くん、これをコーラス部が舞台より披露しました。今後いろいろな場面で歌われるようになってもらいたいです。

もうひとつこの記念式典には目玉がありました。ロビーに掲示した「活躍する奈高OB」ポスター展です。数多くのOBが様々な場所で活躍されていますが、生徒実行委員がみんなに紹介したいOBの方を中心に三十名の現職で活躍されている方をポスターで紹介しました。生徒実行委員で担当を決め、その方に直接手紙やメールを送り、メッセージ、写真を頂きました。詳細については記念誌でご紹介させて頂きますが、ご紹介頂いたOBの方は小山新造、久保 勇、阿部洋己、樋口泰行、喜多恒雄、千本倅生、春田 真、石村繁一、向井利明、千田 稔、絹谷幸二、北村昭斎、安田真奈、中西哲夫、笛吹雅子、三代澤康司、加藤雅也、芳岡秀起、阪本善尚、吉岡 章、柳沢保徳、尾関宗園、上野道善、森 正光、安田暁胤、狭川宗玄、沢井陽一、瀬川雅数、萩原俊嗣(敬称略)です。多くの生徒が興味深く見てくれました。

厳肅な中にも盛大に行われた記念式典でした。その後場

所をホテル日航に移し祝賀会が行われました。あとは記念誌発刊のみです。現在多くの方々に執筆頂き、鋭意制作中です。二月末に発刊します。

以上、奈良高校九〇周年記念事業の報告とさせて頂きたくします。長文をお読み頂きあ

創立九〇周年に寄せて

(本校教職員より)

小川 香

九〇周年の記念すべき年に母校の教員として関わる事ができた事は本当にうれしく思います。奈良高校に入学した当時、教室の窓から見える若草山に、そして授業中に聞こえるウグイスの声に小さな感動を覚えました。年月が経ってもそれは変わっていないことにまたまた感動をしました。そして、生徒たちが勉強に、部活動に、学校行事にと一生懸命高校生活を送っている姿が今も変わらず受け継がれていることがすばらしく、応援せずにはいられません。

りがとうございました。十年後の、一〇〇周年の折には今回以上に会員の皆様のご支援、ご協力をお願いいたします。末筆になりましたが、皆様方のご多幸をお祈り申し上げます。

河路恵二郎

高校三年間は「打倒添上！」を目標にバレーボールの練習に明け暮れました。大晦日に大阪まで練習試合に行ったりしました。しかし、あと二点が取れず目標は達成出来なかったのです。あれから時が流れ、何の因果か長らく添上の監督も勤めた後、母校の指揮を執ることで再び「打倒添上！」の挑戦機会を得ました。高校時代の忘れ物を探すつもりで、目の前の後輩たちと共に充実した幸せな毎日を送りたいと思っています。

木戸 里美

平成二十三年三月、東日本大震災の直後でした。自粛するべきかどうか悩まれましたが、卒業後三十年の同窓会が行われました。なつかしい先平方や同窓生と会えてうれしかったです。余韻に浸っていました。それから数日後分かったことです。私は奈良高校へ勤めさせていただくことになりました。新田先生も一緒でした。その時の驚きは今でも鮮明に覚えています。そして、創立九〇周年の年に母校で勤務できることを幸せに思いました。これからは母校に少しでも恩返しができるように努めたいです。ありがとうございます。

小南 良子

本校に勤務して八年、私はよく中庭の哲人の像を眺めます。あの像は創立五〇周年の記念として私が三年生の時に建てられました。あの時は創立五〇年に思いをはせず、憩いの場であった中庭を壊されたと憤慨したことを覚えています。その私が、再びあの像

を見ることとなり、中庭にそぐわないように感じていた像が風格さえ感じさせるようになっていて、自身の過ごしてきた年月が思いやられ、高3生の時の悪印象もあってか、かえってあの像に引き付けられました。そして今ではあの像を見てこう思います。「堅義の庭は『他者と意見を交わすことで独りよがりにならないように』ということ」「『目の前に役立つ知識かどうかではなく、知ること自体が喜びであり、生きていく意味なのだ』ということ」を伝えていく」と。生徒たちに「知る喜び」をさらに感じて欲しいと思いつつ二度目の奈良高校生活を過ごしています。

小林 和博

昭和五十二年三月に卒業して以来、三十数年ぶりに母校に戻ってきて大変懐かしさを感じています。当時は今と違ってのんびりしたもので、何か浮世離れた先生がいました。特に地理の松藤先生は、教科書をほとんど使わず地理に関する本の紹介をしてい

て、教卓の椅子に座ったまま先生の気に入った部分を声に出して読んでおられました。本多勝一の「極限の民族」三部作の話は特に面白く、自分でも買って読みました。ただ残念だったのはクラブに所属しなかったことです。もともと運動神経がないのは自分でもわかっていたので入れるクラブも限られますが、登山部に入っておけばよかったです残念に思っています。

坂下 泰沼

堅義の庭ができた頃、奈良高校に入学した。柔道部で汗を流し、青丹祭や球技大会で青春を謳歌した高校時代には、奈良高校の歴史も伝統も感じたことはなかった。

でも、これまでの創立九〇周年記念事業を通して、第一線で活躍される先輩、後輩の姿を見て、脈々と続く奈良高校の歴史の重み、卒業生の母校への深い想い、今後の奈良高校への期待の大きさを肌で感じる事ができた。創立九〇周年という節目に教員として立ち会えたこと、そして

何よりも、一卒業生としてこのような母校への思いを実感できたことに感謝したい。

中尾 考周

今年度は創立九〇周年の企画、運営、そして急にすることなった進路部長、最後は昭和五十九年卒の三十年ぶりの学年同窓会の幹事長と奈良高にはじまり奈良高で終わるといふ一年でした。でもしんどかったとかイヤだったと思っただことは全くなく、毎日たいへん充実していました。母校のために働けることが喜びで、生徒でもある多くの後輩と一緒に過ごした時間が幸せでした。ありがとうございます。

中澤 祥恵

私にとつて奈良高校は、学ぶことの面白さ、様々な個性と触れ合うことの楽しさを教えてくれた場所でした。そして、気がつけば、そんな中で一生成長していける教師の道に進みたいと思うようになっていました。八年前久々に戻ってきた母校には、自主創

造の校風がきちんと受け継がれていました。何にでも一生懸命で楽しむことの上質な後輩達から元気をもらおう毎日です。彼らと共に創立九〇周年の節目を迎えられたことをとても嬉しく思っています。

中辻 和宏

高校生のとき、全国大会を夢に、毎日、体育館でボールをおいかけていました。何かの縁で先生という立場で母校に帰らせていただき、周りのたくさんの人たちに支えられ、素晴らしい力を持った子どもたちに出会うことができ、毎日、子どもたちとボールを追いかけることができて

いることに感謝の気持ちでいっぱいです。これからも、すばらしいエネルギーと可能性を持った子どもたちと、一緒にボールを追いつづけていきたいと思っています。

西谷智佳子

四月の異動で母校に戻り、九〇周年に在職させていただきましたことができました。生徒た

ちと不退寺でお話を伺ったり、学校周辺の文学散歩をしたりして、文化の香り豊かな所で学んでいたのだということも改めて実感しています。高校時代はバスケット三昧で、歴史や文化を味わう余裕もなかったのですが、そのバスケット部の仲間が、今でも何でも話せる親友です。集まれば必ず話題に登場する奈良高校の三年間は、かけがえない時間です。

新田由美子

三年間共に過ごした友との絆は時を経て、たとえば同窓会の席であるいは偶然の再会の折鮮やかによみがえり、自主創造の校風も活躍する仲間

のなかに今なお息づいていると、いつも以上に感じた一年となりました。校舎を取り囲む桜、帰り道の銀杏並木、玄関前の鮮やかな紅葉を、生徒として保護者としてそして今教員として、それぞれの感慨で眺めながら、この場で過ごさせていただくご縁に感謝しています。祝創立九〇周年。

藤本 幸代

高校時代と同じように、若草山と東大寺の姿に目を洗われる毎日です。創立九〇周年式典では、音楽系クラブ（吹奏楽部五十九人、ギターマンドリン部三十三人、コーラス部二十三人、邦楽部八人、軽音楽部有志四人）も様々なシーンで出演させていただきました。奈高賛歌の演奏を、講演を終えられたマイクロンフト社長の樋口様が舞台袖で立って聞いてくださったのが印象に残っています。節目の年に職員として在籍できたことを幸せに思います。

森田 好博

本校に勤務させていただき早や十年、SSHを担当させていただき、科学を通していろいろなプロジェクトに生徒達と挑戦した楽しかった日々を思い出します。日米理科共同ネットワークでNASA（JPL）、UCLA、内閣総理大臣科学奨学生プログラムではシドニー大学へ生徒と共に訪れ、本校の取組を発表してきました。また南極昭和基

地より「南極授業」を衛星回線ですべていただいたりした幸運な体験はひとえに母校で勤務させていただいた賜であります。さらに、いろいろな所で本会の会員の皆様にもお会いできましたことも、私の財産となっております。また、本年度は本会の事務局を担当させていただき創立九〇周年記念事業では皆様に御指導いただきましたことをこの場をお借りして御礼申し上げます。

山中 伊織

九〇周年という記念すべき一年を、後輩である生徒たちとともに過ごすことができましたことをうれしく思います。自分が高校生ときは、図書室（今の進路室）で本を読んでばかりいて、何とも思わず過ごしていたけれど、教員として戻ってきて、生徒たちの力、とくに、一人一人が全体のことを考えながら力を尽くすことで発揮される集団としての力の大きさを感じます。今年はその思いをさらに強く感じた一年でした。

吉村 貴至

人生の三分の一を数える年月を、私は奈良高校で過ごしています。現役の三年生の時、榎原敬之の「どんなきも。」がヒットしました。歌詞の中で「旅立つ僕の為にちかったあの夢は古ぼけた教室のすみにおきざりのまま」というフレーズが一番好きでした。歌詞のとおり母校に戻って野球

『豊かな時』

朝、ごみ収集車がやってくる。カラスが引きずり出して散乱したごみを、若い作業員が丁寧に拾い集め、箒できれいに掃除をしていく。頭が下がる。多くの人々の少しずつの善意が積み重なってこの世の中は成り立っている。今日も気持ちのよい一日がスタートする。昨秋、思い立って一月ほ

部の監督として甲子園を目指し、毎年夏の大会には多くの方に応援にかけつけていただいています。また担任として後輩である生徒たちと楽しく毎日を過ごさせてもらっています。充実した毎日に、本当に幸せなことだと感謝しています。（以上、本校教職員 宝相華会 五十音順）

谷 垣 暁 弘

（昭41年卒）
元教諭（昭54〜63年迄在職）

パソコン教室に通った。「ワード」と「エクセル」の入門講座である。現職の頃は「二郎」を使っていたが、昨今はワードがスタンダードとかで、自治会の仕事等で必要に迫られての「六十半ば過ぎの手習い」になった。ついでに、使えれば大変便利と聞いているエクセルにも挑戦してみた。生徒はご婦人と小生

のような男性高齢者が中心で、そういう意味では、手のかかる生徒たちであった。あちでもこちでも「先生、わかりません」と手が上がる。そのたびに先生は、軽やかに生徒たちの間を飛び回り、丁寧に指導をしてくださる。古い話になるが、ボクシングのチャンピオン、モハメド・アリのスタイルは「蝶のように舞い、蜂のように刺す」であったが、その先生はまさに「舞うように教える」親切で頼もしい指導者であった。

ちようと五十年前、奈高に入学した頃、錚々たる先生方が教壇に立つておられた。現代国語を教わったK先生、今も鮮明に覚えているのが芥川の短編『或日の大石内蔵助』。目の前におられる先生が主人公の大石に重なった瞬間があった。人間の内奥の微妙な揺れ動きを、演じるがごとく解説してくださる先生、まさに大石は目の前にいらっしやる先生その人であった。先生のゆるぎない博識と豊かな人間性が、我々を小説世界の真ただ中に誘ってくださった。

我が町のお祭り「当家祭」

武 村 純 一

（昭42年卒）
元教諭（昭48〜61年迄在職）
元校長（平18〜21年迄在職）

退職して五年が経過しようとしています。この間、宝相

華会の行事への案内をたびたびいただいているのにもかか

わらずあまり出席できなく申し訳なく思っています。

そんな折に会誌の原稿依頼を受け、何を書くか迷いましたが、今年十月、十歳、小学四年生の孫が、赤と白のタスキを垂らした烏帽子の冠を被り長い行列を従えて氏神様まで練り歩いた我が町八坂神社のお祭り、古い形式を今も伝える「当家祭」を紹介することにしました。

いつの時代に始まったか定かではありませんが、十歳になり、誕生が最も早い男子がその年の当家児となる。昔は子どもの数も多く、なかなか当家児にはなれなかったのですが、最近はその子化のためか、必ず回ってきます。

お祭り前日までに六人衆と呼ばれるむらの長老が、神前に供える特殊な神饌を作ります。その神饌はお渡りの当日、「ごく担ぎ」役の小学校高学年の女の子六人が担ぎます。

当日は宮座の人たちが当宅に集まり、お飯屋で神事が執り行われ、その後、神官を先頭に、御幣、当家児、六人衆、ごく担ぎ、親族と長い行



列が出發し、八坂神社に向かいます。沿道には多くの方々が行列を見守り、中には遠方からこの行事を見に来られる方もあります。神社に到着すると本殿に神饌、お神酒等を供え、神事が執り行われる。道中、「トーニン、トーニン、ワツハツハー」との掛け声もあり、観衆から思わず笑いが出ます。

あちこちで村祭りが消えていく中で、今日まで受け継がれてきた我が町の「当家祭」、いつか機会があればお越しください。

九〇周年を迎えられた奈良高校そして宝相華会の益々のご発展をご祈念申し上げます。

総合制第一回卒業式の思い出(感想)

嶋田 彰 治
(中20回卒)



旧制奈良中学の最後の卒業である私は、奈良高校(総合制)第一回卒業生でもある。同級生の中には、旧教育制度の最後の入学生として進学した者もいる。

昭和二十三年四月、GHQ(連合軍総司令部)の命令により、教育制度が改められ、奈良中学はそのまま奈良高校になった。他の中学校や高等女学校なども同様に高校になった。この時点では六三制が実施されたが、中学校が高校になっただけの改革であった。

同年九月より、GHQ(連

合軍総司令部)の命令により、教育制度が改められた。その特徴は三つの原則である。①総合制、②学区制、③男女共学制である。

総合制のため、普通科と実業科(商業科など)そして女子科(旧女学校)が強制的に合併した。奈良高校の場合は、旧奈良中学、旧奈良商工業校、旧奈良市立高等女学校は別個の高校であったが合併した。総合制高校の発足である。

総合制と男女共学制の施行は大きな問題が生じなかったが、学区制はさまざまな悲喜劇を生んだ。生徒は居住地が奈良市以外の場合、強制的に転校させられた。大和郡山市(当時、生駒郡郡山町)から通っていた者は郡山高校に転校させられた。天理市(当時、山辺郡丹波市町)から通っ

ていた者は添上高校に転校させられた。当然、その逆に奈良市に住んでいるため、奈良高校に転校させられた者もある。

男子校の奈良高校に突然女子生徒が現われ、見たこともない同級生ができ、共に学び遊んだ同級生が消えた。今なら大きな社会(教育)問題だが、敗戦国日本にとってGHQの命令はオールマイティーで、命令は粛々と行われた。

六三制の黎明期の話が長くなったが、第一回卒業式の記述の背景であるのでやむをえない。

さて本論だが、第一回卒業式は昭和二十四年三月一日に、旧奈良中学の三階講堂で行われた。余談だが、奈良中学では講堂と言わず正殿(せいでん)と言っていた。

敗戦により、民主主義教育が本流になった。そのことは当然であるが、教育者が民主主義に慣れていないため試行錯誤があった。卒業式にも試行錯誤があった。

通例、卒業証書は校長が生徒代表に一括授与するものだ

が、生徒はすべて平等であるという見地から、一人ひとりに直接授与されることになった。卒業生は点呼の順番に右側の階段を上がり、校長先生より証書を受け取り左側の階段を降りて自席に戻った。

前年九月に着任された校長先生は、生徒の顔(氏名)をほとんど知らなかった。そこで行われた方法は、証書を点呼の順番に重ねておき、順次機械的に授与された。ところが卒業生の中に悪童が二、三人おり、無断欠席したのである。

このため、最初の方に呼ばれた者は自分の証書を受け取ったが、大方の者は他人の証書を受け取った。私はSさんという女性の証書を受け取った。式典終了後、大騒ぎをして証書を取り換えたことは言うまでもない。

前述のように強制的に学区制などが行われたため、一緒に学ばなかった者が同期生として同席したのである。卒業生を経歴により分類すると、次の六種類になる。

- ①奈良中学系、②奈良商工

業校系、③奈良市立高等女学校系、以上は主流だがその他の系列もあった。④学区制で二学期から転校してきた者、⑤朝鮮半島など植民地から帰国し転校してきた者、⑥奈良中学の一年先輩で旧制度の受験に失敗し二浪したため、高校三年に転(再)入学し、高校を卒業した者の六種類である。

あとがきの記述になるが、総合制第一回卒業の意識はほとんどない。奈良中学第二十回すなわち最後の卒業生の意識は当然ある。同窓会も奈良中学第二十回卒は四十数

年前から毎年行っているが、総合制高校第一回の同窓会は存在しない。

平成二十五年は奈良中学卒業六十五周年であった。節目の年の五十周年、同六十年の同窓会は母校跡地にある春日野荘で開いた。七十周年は極めて高齢であるため、六十五周年を節目と考え、平成二十五年十一月十五日に春日野荘で同窓会を開催した。十四名が出席した。手前味噌だがこの同窓会の幹事は沢井陽一元宝相華会会長と小生が務めた。

傘寿の同窓会を開催

鹿野靖郎

(総4回・昭27年卒)

平成二十五年十月十八日(金)我々昭和27年卒業生は傘寿を迎え、奈良ホテル大和の間に於いて第十七回目(二年に一度)の同窓会を開催致

しました。指名交代制の世話人は前回指名を戴いた私、鹿野靖郎が案内、その他一切と司会進行役を担当させて頂いた。案内状に関しては宇楚君

のお助けをいただいた。今回は殆どの方が傘寿を迎えられて案内数三百二十名に対して何名の出席を頂けるか、とても心配であった。が出席の返信を頂いた方は男子四十一名、女子四十五名の八十六名、加えて恩師の山崎学先生、そして何十年ぶりの御出席となる大山富子先生も療養先の「あすならホーム天理」より車椅子ながらの御参加をいただきました。大山先生は今もなお中高年マスターズの役員をされておられるそうです。

定刻十二時に集合した八十八名は、ホテル玄関で記念撮影。直ちに同窓会会場に移動。会場は大和の間。着席式の円卓ビュッフェスタイル。そして開会宣言後まず前回以降に逝去された仲間達、男子六名、女子三名の名を読み上げ一分間の黙祷を捧げる。次は来賓の恩師山崎学先生のご挨拶をいただく。思ひ出話等昔なつかしき話をお話しされるお姿を見て、記憶力のすばらしさに感動する。次に乾杯の音頭は八尾から出席の稲田君(旧姓村崎)にお

願いました。乾杯の後はいつもの通り無礼講で若者にもどつた様な楽しい団欒の場と変った。

しかし、宴もたけなわの折、私世話人から一つの提案を致しました。それは最近いろいろな話の合間に、年も年だから次の同窓会が最後になるかも知れないなあと云う話題が良く出ておりました。それに尾ひれがついて次回の同窓会が最後になるらしいと噂が立ち、数名の方々から次でお終いですかとか返信ハガキに最後になるそうですからぜひ出席致しますとの伝言もありました。その都度違うむね返答致して居りましたが、事実次の世話人となる方が見つからず困惑しておったのは事実です。そこで皆んなに年も年で世話人のなり手が無いのですが、どなたか手を上げてくれませんかと問いかけました。手を上げる方はいませんでした。そこで今回を以って一応「まほろば同窓会」に終止符を打ちましょうかと提案致しました所、やめないで続けてほしいとの意見が多く、賛否



をとった所、大多数で存続する事に決定致しました。但し世話人については後日皆さんで良く相談してと云う事で一応決着し、一次会はお開きとなりました。

次は毎回行っている二次会です。会場を隣部屋の「若草の間」に移してにぎにぎしくカラオケ大会です。口火は世話人の私が、裕次郎の「恋の街札幌」で勤めました。次々と変らずの美声の間にも次回の世話人の話題でカラオケそっちのけで意見交換会の様子になって来た時、鈴木治君が次回世話人をゲットしてくれました。それは本日乾杯

の音頭をとってくれた稲田君です。鈴木君のネバリ腰に降参したそうです。そして世話人を引受けるが、この年で二年に一回では少ない。毎年やろうじゃないかとの御意見、御希望があり全員賛成で早速来年十月に行う事に決定致しました。直ちにホテル側と交渉して来年十月の月末(金)の仮予約を致しました。次回来年十月の出席者が今回より多数となる事を願って世話人

をバトンタッチ致します。稲田君次回をよろしく。

「追伸」 当日大山富子先生より中高校マスターズに關する本を二冊奈良高図書館に寄贈する様依頼を受けましたので十月二十日、学校に持参、当日御出勤の先生に依託致しました。

機会があれば御一読下さい。

母校創立七〇周年頃のメモ

宝相華会顧問

藤 本 忠 彦

(昭31年卒)

春の選抜野球大会に出場

平成五年の創立七〇周年を二年先に控えた、平成三年二月一日夕刻森井実校長のもとに思いもよらぬ朗報が伝えられた。それは選抜野球大会に出場決定の知らせであった。本校と甲子園とは、誕生が大正十三年「甲子」きのえ・

ね」の同い年で、奇しき因縁と言わねばならない。

さあ、それからが大変であった。軍資金の調達である。一回戦三千万が相場で何としても三回戦ぐらいまで勝ち進んでもらいたい、との思いで一億円を目標に後援会(会長は河合武男同窓会長)を組織

し育友会(会長は内矢良一氏)と共に、各界をかけずり廻り九千四百二十万円の戦費調達ができた。

愈々三月二十九日決戦の時来る。当日は、バス五十台を連ね電車組も合わせ六千名の大応援団の声援を受けて、風味監督以下選手諸君にとつて将に世紀の大勝負を迎えることになったのである。その相手は強豪桐生第一高校である。結果は中盤まで押され気味であったが中盤以降よく立ち直りはしたが、残念ながら一〇対六で無念の涙をのんだ。しかし敗れたとはいえず正々堂々とした戦い振りに大きな声援が大銀傘にこたました。

仮称「青丹会館」の建設

平成五年が母校創立七〇周年である。その前の創立六〇周年記念事業として図書館・視聴覚室の建設を行ったので、七〇周年事業としてどのような事業に取り組むかを検討することになった。そこで取り上げられたのが「同窓会館の建設」である。同窓会



第63回選抜・高校野球大会出場記念

も設立以来六十五年にもなれば諸資料類も相当量となりそれらは、食堂隣接の資料室をお借りし、又会議は学校の会議室を使わせていただいていた。

一方学校としては、文武両道の教育方針のもと合宿訓練室が是非必要で、それなら両方の目的を備えた施設を、ということになり、仮称「青丹会館」として事業を進めることとなった。建物は鉄筋コンクリート二階建て三二八㎡の瀟洒なものである。請負業者は、浅沼組(奈中15回卒の浅沼誠雄氏が代表取締役)に決定した。

七〇周年記念事業としての

目玉は会館建設であるが、同窓会名簿及び記念誌発行費其の他諸経費を含め一億三千万円近い経費が必要となった。早速資金集めである。宝相華会（河合武男同窓会長）は育友会（会長は28年卒の植原一光氏）と共に賛助金の依頼を行い概ね調達出来た。

なお、会館の名称は正式に「セミナーハウス・宝相華」と決定された。

七〇周年記念式典挙行

平成五年十月二十五日、柿本善也県知事初め二百三十名の来賓を迎え体育館において記念式典が厳かに強行され、堀井清市校長（現・堀井巖参議院議員の父君）は、式辞の中で「来るべき二十一世紀を担いリードする人間の育成に邁進したい。」旨希望に満ちて語られた。

続いて春日野荘に移り華やかに祝賀会が催され、その席上建築担当の浅沼組及び、建物東面上に取り付けられている時計塔の瓦製宝相華文様制作者鈴木啓之氏（奈中19回卒）に感謝状が贈呈された。

古稀雑感



古稀の声を聴いて感じるのは、急に同窓会がふえた事である。私たち昭和36年卒は森岡正宏君の政界進出も有り、応援の意味でも集まる機会があつた方だがそれも最近は少なくなつたな、と思つていたら古稀に達し、先ず昭和33年卒桜井中学校の学年同窓会が案内された。迷わず出席したが、数十年をへた同級生は名前を聴けばいくつかの記憶が蘇るものの、外見だけではとても当時の童顔を思い出すのも困難な人も沢山いた。何人かの親しかった友人の消息を聴いても、既に故人となつて

志野忠司

（昭36年卒）

いたり消息不明の人もいた。次に案内があつたのは奈高36年卒五組浅野学級で有る。一昨年、昨年と連続で開催され、遠隔地からの参加者も含め出席者は多い方で有ろう。お世話をしてくれる幹事には感謝するしかない。確か二十年前ほど前には浅野先生御存命中に何回か集まつた記憶があるが、これも先生が亡くなられてからは久しぶりの集まりとなつた。

森岡君にしても四百人もいた同級生の中にそんな人がいたとも知らず、卒業後噂に聞いた事が有つたが、彼が政界進出をしなかつたら今もほとんど交流は無かつたで有ろう。中寫君の紹介で藤原君（現同窓会副会長）と出会つたのも、息子が小学生の時であつたから三十年も前、卒業後二十年であつたと思う。藤原君から親友の森岡君が政界進出の意欲があると聴いて、私は迷わず応援する氣になつた。奈高卒業から当時まで、森岡君と私は殆ど相反する政治的な道を歩んで来た。しかし国の為、民の為、同窓生が政治に挑むと聴いて頑張る人がいるなら、応援するのが当然と言う氣持ちであつた。同窓生に呼び掛けると政治姿勢云々と言う人もいたが、そういう小異も乗り越えて付き合えるのが同窓生の良い処ではなからうか。森岡君を応援したのをきっかけに有山、森川君らとも交流が始まつた。

勿論現同窓会小山新造会長とは同じ組になつた事もあり、共に奈良にいたので知り合いで有つたが森岡君の事でより親しくなつた。先ほど私は森岡君とは政治的には相反する道を歩んできたと言つたが、早熟な政治少年であつた私の政治の記憶は十歳前後から有り、今も政治や歴史には深い関心を持つている。約六十年の政治の記憶の中で一貫不惑の人は少なく、又、一貫不惑とはかつこ良い言葉であるが、必ずしもそれが正しいとは思わない。六十年の間、何の勉強もせず世の中も見なかつたら、それも可能で有ろうが人の思想は変化し発展するのは当然であると思う。昔、外的強制力で思想や政治的立場が変わる事を転向と言つたが、思想、信条の自由が保障されている今の時代は、自由な勉強をすれば考え方が変化、発展するのはむしろ当然で有ろう。私の嫌いなのは、何らの苦悩も伴わず利害で立場を変更しながら、知らん顔で陽のあたる処ばかり歩いてる人であり、この氣持ちだけは六十年一貫不惑である。六十年政治に関心を持ち、

歴史に関心を持ち続けたお陰で、今の国際情勢の問題点は私なりに良く分かる。中国は毛沢東の時代から、朝鮮は金日成の時から同時代で見てきた。今でこそ尖閣や竹島は国民の関心事だが私は六十年間の関係国の主張の変化が手に取る様に理解出来る。ついながら近未来の展開も予想できるが、今回は場所が違うので解説は控えておこう。

いわば私の思想史の同級生？とも言うべき、事実昭和十七年（一九四二年）生まれの金正日やカダフィも今は亡く、胡錦濤は引退し日本では小泉純一郎や小沢一郎が微妙に気を吐いている。あと十年？人生をかけて政治や歴史に関心を持ち続け自らの総括をするのが私の老後の楽しみである。

これから未来に羽ばたく 卒業生、在校生の皆さんへ

京都大学大学院
工学研究科教授

乾

晴行

(昭54年卒)

奈良高校を卒業してから三十年以上が経ちました。この間、母校に足を踏み入れることは殆どありませんでしたが、この数年、SSH（スーパー・サイエンス・ハイスクール）事業の運営指導委員を拝命し、年に一、二度、母校を訪ねる機会があります。SSH日事業は、「先進的な理科教

育を実施し、獨創性、創造性を高める教育指導法を開発する」ことを目指して策定されたもので、担当の先生方のご努力により、厳しい競争の中で、文部科学省から選抜、指定を受け、先進的な理科教育活動が続けられます。このようなSSH活動に参画させていただく中で、母校における

SSH活動で中心的な役割を果たされ、同級生でもある森田好博教諭からこの小文を書く機会を与えて頂きました。「卒業生にむけてのメッセージを入れていただいても構いません」とのことでしたので、ここでは近況の報告を少しと卒業生、在校生の皆さんへのメッセージを記してみたいと思います。

私は、現在、京都大学大学院工学研究科で「原子一個一個を観察しながら優れた材料特性を発現させるように原子の配列を操作する」研究に従事しています。研究室を主宰して十年余になります。三、四年に一人くらいの割合で奈良高校出身の学生が研究室に入ってきてくれます。自分自身は毎年一歳年を取りますが、いつも同じ年齢層の若い学生さんを相手にできますので、「気持ちだけは若さを保つことができます。年に一度のSSH日研究発表会で、奈良高校在校生の研究発表を聞く機会があります。自らテーマを設定し、仮説を立て検証し、その内容をわかり易く、元気に発表してくれます。発表に対し意見を述べる立場で臨みますが、発表は年々高度に進化し、研究者としての原点を見つめ直す意味でも楽しく出席させていただいています。つい先日、森田先生から京都大学で研究室見学の依頼を受けました。二つ返事で受諾しましたが、出席者は生徒ではなく、育友会の保護者（主としてお母様方）であるとお聞きし、初めは少し戸惑いました。七十名余の参加をいただき盛会となった研究室見学では、電子顕微鏡で原子一個一個を見ていただきましたが、お母様方から出る原子観察に関する確な質問には、「さすが奈良高校生のお母様方！」と感心せずにはいられませんでした。この見学会では私の研究室に籍を置く奈良高校出身の学部生にも手伝いをお願いしました。最後に設けた質問時間で「私にでも、この学生にでも質問があれば？」と問うと、私はそっちのけで、「いつ頃から勉強を始めたの？」「何時間勉強してたの？」等々、学生に質

問が集中し、お母様方の教育熱心さを改めて認識した次第です。京都で毎日生活を送っていますと、しばしば日本の美しい歴史や文化に接することができます。歴史ある寺社で季節々々に鑑賞する桜や紅葉の風情は、ご承知の通り筆舌に尽くし難いものがあります。しかし、それだけではありません。『ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず。よどみに浮かぶうたか



たは、かつ消えかつ結びて、久しくとどまりたるためしなし。世の中にある人とすみかと、またかくのごとし。』

これは鴨長明が京都郊外に結んだ庵で一二二二年に著した「方丈記」の冒頭です。古典の授業で習った方も多数おられると思います。数年前の華やかな平城遷都一三〇〇年祭ほどではありませんが、昨年（二〇一二年）はこの「方丈記」が執筆されて八〇〇年の記念すべき年でしたので、京都を中心にとよつとしたブームになっていたことをご記憶の方もおられると思います。この「方丈記」が書かれた時代は、武家政権の誕生、飢饉、津波を伴う大地震や竜巻、火災など自然災害が頻発した時代で、政権交代や東北大地震など多くの地震、台風などの自然災害に見舞われ、経済的な閉塞感が続くこの二十年ほどの日本と時代背景を重ね合わせることができ、そのような事も手伝ってかブームになったように思います。

鴨長明は、川を流れる水は決して元には戻らないことを見て、「この世には常に同じものは無い」（仏教的無常観）と感じ、無常な世の中にただ絶望するのではなく、その現実を客観的に観察して受け容れ、自分らしく生きることの大切さを説いたと解釈されています。この意味では、卒業生、在校生の皆さんには、先が見えないこのような時代だからこそ、周りの状況に感化されることなく、夢を持って、じっくりと自らを研鑽していただきたいと思います。「方丈記」には、また、世の中には常なるものはないけれど、川の流れ自体は絶えることが無いという種々の歴史観を描いているとの解釈もあるそうです。この解釈に基づけば、川は学校、流れる水はそこに入学してくる生徒、学生と考えることもできるかもしれません。「方丈記」冒頭の「うたかた（泡）」は儚いものの代表として描かれているようですが、自然科学における「ひらめき」や「発想」とも似ているかもしれません。うたか

たが消えては現れる様は、まさに、川を流れる生徒、学生から「ひらめき」が生まれ、次から次へと俊英が学校に現れる様を表していると考えてみてはどうでしょうか（この解釈の飛躍は古典の先生に怒られるかもしれません）。奈

良高校の卒業生、在校生の皆さんには、小川（初めは佐保川でしょうか）から大河に流れ、さらに大海を経て、世界へ華麗に羽ばたいていただきたいと思えます。縁あって、京都でお会いできることを楽しみにしております。

東京支部だより

二〇一三年度宝相華会 東京支部定例総会の開催

支部長 阿部 洋 己
(高31年卒)



例年雨に祟られることの多かった総会当日、今年の十一月九日の土曜日は快晴に恵まれ、例年通り、日比谷公園にほど近い法曹会館で開催され

ました。時間的に若干の余裕があったため、丁度この時期、同公園で開催されている菊花展を通りすがりに観賞し、白、黄色、紫のそれぞれのその見事な花振りにしばし癒されて、もう何年も通いなれた会場に着きました。受け付けの皆さんと共に来賓の皆様をお迎えすべく、いかにも格式充分の雰囲気のコピーでお待ち

してました。

本年も七十名弱の会員が集まってくださり、母校からは小林勢治校長先生、反田かおる事務長、森田好博先生（総務部長）、本部からは江島和哉副会長がお見えいただき、支部総会に華を添えていただきました。

会に先立ち、支部の事務局で把握しているお亡くなりになった四名の物故者の方々への黙とうをささげた後、開会宣言が司会者の谷口律子様（高52年卒）から行われました。

冒頭、阿部洋己支部長による上記四名の方の来賓紹介が



あり、支部長としての開会の挨拶、出席者への謝辞、今後の出席者をより多くするための方策として卒業年次にはその学年の理事がいる手立てを講じて来年度以降もより活発な支部活動を心掛けて行く旨の所信表明がありました。

慣例に従い、阿部支部長が総会の議長に選出され、早速、議事進行に進みました。坂口尚史副支部長（高36年卒）から本年度の活動報告の説明が行われ、前田正躬会計担当（高35年卒）から会計報告、猪岡香会計監事（高30年卒）から会計監査報告が行われた後、一括して審議の結果、全員異議なく承認されました。

引き続き杉美智男事務局担当（高32年卒）より来年度の活動計画および予算案の説明がありました。来年度も本年度同様に年二回の「散策の集い」、年一回の「親睦ゴルフ会」の開催をはじめ、より積極的な活動を行う方針であること、来年度の支部総会は二〇一四年十一月八日（土）に行う予定との説明があり、異議なく了承されました。続

いて今年度は役員改選の年次にあたり、旧役員に加え、新たに大原俊一（高49年卒）、阪原秀行（高49年卒）、植田恭弘（高56年卒）、鈴木寛（高56年卒）、土肥口泰生（高56年卒）の五名の諸氏を選任し、了承されました。

総会の議事終了後、続いて来賓の小林校長先生から祝辞をいただきました。奈良高校は本年度も進学校として国立、有名私大への素晴らしい進学実績をあげ、全国にその名を馳せることが出来たと、またスポーツ、文化活動面でも近畿地区大会、全国大会と活躍の場を広げて文武両道の誉れ高い実績を残せたとの嬉しい報告をしていただきました。また、本年度が創立九〇周年に当たることから鋭意準備を進め、先般十一月三日に盛大に創立記念事業が行われたことの報告がありました。ひとえに宝相華会のご協力とご尽力の賜物とお礼の言葉がありました。詳しくは後程の森田総務部長の九〇周年事業についての詳細説明に委ねたいとされて来賓挨拶を

締めくくられました。続いて本部江島副会長の来賓の挨拶をいただいた後、森田部長から九〇周年事業の実施報告がありました。映像を使った分かりやすい説明で記念事業は在校生の全くの手作りで特に同校吹奏楽団、マンドリンクラブ、箏曲部による百名以上の演奏は見事と言う他はありませんでした。なら100年会館での厳粛な中にも明るい華やいだ雰囲気での記念式典の様子がよく分かりました。



続いて第二部、「記念講演」に移り、司会の森本和滋様（高40年卒）から講演者の岡本明様を紹介されました。岡本様

は一九四九年生まれ、奈良高校昭和43年卒業、現在、明治学院大学文学部芸術学科教授。早稲田大学第一文学部演劇科を卒業されて、一九七一年「錬工房」を創立、主宰されて現代演劇の柱にとらわれない身体表現の可能性を追求。能を現代に生かす演出家として国内のみならず、世界各国でも活躍されている方で本日は「能を現代に活かす」（海外公演の反響と文化交流）と題して一時間の講演をいただきました。

能という日本の伝統演劇が持つ「変身」のあり方、語り物の構造が現代演劇の重要な演技の問題として捉え直され

て海外でも大きな反響を呼んだ興味深い内容のお話でした。詳しくはご本人が同窓会報誌「宝相華」に寄稿されることですのでお読みいただければと思います。

第三部の懇親会は新任理事の鈴木寛様（高56年卒）の司会で乾杯の音頭を前支部長の吉岡克己様（高30年卒）にお願いし、一同、ビールのグラスを高く掲げました。卒業年次を超えて広く親睦の輪が広がり、和気藹々のうちに時間はあつと言う間に過ぎて最後は恒例の奈良高校校歌合唱で有意義な会合に幕を降ろしました。

「井の頭恩賜公園周辺の散策ウォーキング」

東京支部・事務局

杉

美知男

（昭32年卒）

東京支部の同好会「首都圏近郊散策の集い」は十月十二日（土）に井の頭恩賜公園周

辺の散策を行いました。当日は都心部では三十一・三度の真夏日で、最も遅い真夏日の

記録を更新という秋とは思えない暑い日でしたが、熱中症に気をつけながら元氣よくJR三鷹駅を出発。文豪たちの眠る街・三鷹の市街をぶらつきながら、風の散歩道と呼ばれる玉川上水沿いの道に向かった。途中にある三鷹市山本有三記念館（ここは作家・山本有三が昭和十一年から昭和二十一年まで家族とともに住んだ家です）の公園で小休止、再び玉川上水に沿って井の頭恩賜公園に向かう。井の頭恩賜公園は、大正六年に日本最初の郊外公園として開園しました。公園中央に位置す

平成二十六年度
東京支部総会（予定）
 日時：平成二十六年
 十一月八日（土）
 十五時三十分開会
 場所：法曹会館 千代田区霞ヶ関一ー一
 会費：七、〇〇〇円（予定）
 総会：十五時三十分
 記念講演：未定
 講師：交渉中
 懇親会：十七時三十分
 十九時三十分頃

る井の頭池は、初めて江戸に引かれた水道「神田上水」の水源でした。春には「サクラの名所」として多くの人が訪れ、また武蔵野の面影を残す雑木林があり、一年を通じて多くの人が散策に訪れます。井の頭池周辺を散策後、近くのレストランで昼食、食後に再度公園内をぶらつき大道芸のパフォーマンスを楽しみ、井の頭弁天を回って吉祥寺駅で流れ解散となった。今回立ち寄りなかつたが井の頭自然文化園（動物園）や三鷹の森ジブリ美術館などもある。（写真は「井の頭恩賜公園内」にて）



- 今回の参加者は
- 高野 史（高40年卒）
 - 福野 節子（昭28年卒）
 - 高原 慶子（昭28年卒）
 - 吉岡 克己（昭30年卒）
 - 福井 秋夫（昭32年卒）
 - 鈴木 恵子（昭32年卒）
 - 栃藪 輝子（昭32年卒）

大阪支部だより

奈高九〇周年記念式典に想う

久保 勇
 （昭27年卒）

高野 史（高40年卒）と私を含めて八名でした。今回は平成二十六年四月十九日（土）頃に実施を予定しております。



十一月三日（日）文化の日、当日は時折小雨のそぼ降る生憎の天気でしたが、本日は、母校の奈良高校創立九〇周年の記念事業の最後を飾る記念式典の日です。会場（なら100年会館）に入ると、現在活躍

されているOBの方々のプロフィールの紹介とメッセージがまず目に留まりました。いろんな分野で御活躍の多士済々の方々、多様な逸材を輩出してきた事にあらためて意を強くしたところです。

先ず案内されたのが、コーラス部やギター・マンドリン部の軽音楽を演奏されている小ホールでした。学生さん達のいずれもが、礼儀正しく、親切で、「お・も・て・な・し」

の精神にあふれ、さすが母校の学生さん達と深い感銘を受けました。

大阪支部は今年四十回目の総会・懇親会を七月十九日（金）に上本町のシェラトンホテル大阪で開催し来賓の先生方や宝相華会の役員の方々のご参加を頂き、百八十名で盛大に開催することが出来ました。今年は、奈高創立九〇周年と宝相華会大阪支部の四十回目の総会・懇親会と節目が重なるめぐり合せの年となり、メインテーマとして、森田先生に南極観測隊に参加された時の講演、中尾先生には奈高九〇周年記念事業の御紹介をお願いいたしました。大変お世話になり改めて感謝いたします。

いよいよ本番の記念式典が始まる大ホールに舞台は移り、「繋ぐ歴史、受け継ぐ伝統、未来に向かう創造力」をスローガンに、九〇周年生徒実行委員長の開会宣言で記念式典が始まりました。小林勢治校長の式辞の中で、今回の記念式典では、学生たちが自主的に生徒実行委員会を立ち上

げ、式典の運営に全面的に協力してくれたことが紹介されました。まさに「自主創造」の校風の発露といえます。

奈良高校は、近畿圏有数の進学校であるだけでなく、「スーパーサイエンスハイスクール」の中核拠点校として学業の向上に加え、体育系クラブや今回の式典を盛り上げてくれた吹奏楽部、コーラス部、ギター・マンドリンクラブ、邦楽部等の文化クラブの活動も盛んで、情操教育の進化には正直心を打たれるものがありました。中でも若手OBの音楽家によるヘンデルやビゼー作曲のオペラの声楽演奏はまさに一流、新たな感動の一時を堪能させて頂いたのが印象に残りました。また、日本マイクソフトの樋口泰行社長の「奈高生に贈ることば」の記念講演があり、学生さんの進路にはいい刺激になったと思います。

記念式典が終わり、場所を日航ホテルに移し、祝賀会が行われ、来賓、学校関係や宝相華会の役員の方々と懇親を深めました。

今回の記念式典に宝相華会の役員として参加させていただき、改めて母校の素晴らしさとそこに学んだことの縁に感謝し、同窓会活動を通じて、諸先輩、後輩の方々と絆を深めると共に、母校への一層の支援に向けて誓いを新たにしたいところです。

最後になりますが、創立九〇周年の本年が、次の大切な節目（一〇〇周年）に向け、母校奈良高校が日本の、そしてグローバルな真の名門校として、力強く羽ばたいていただく年になります事を心から祈念いたします。

〓次回総会・懇親会の予定〓
平成二十六年

七月十八日（金）
十八時より総会に向け着席
十八時十分より支部総会
十八時四十分より懇親会
二十時三十分 閉会
於…シエラトン都ホテル
大阪（近鉄奈良線大阪
上本町駅直結）
TEL…〇六一六七七三
一一一
会費…八、〇〇〇円

つどい会だより

県立奈良高校創立九〇周年
記念祝賀式典を祝う

通信制同窓会つどい会顧問 中川 昭雄
(通平10年卒)



母校OBの一人として、言葉に言い表わせない幸せを必々と感じておりました。

菊薫る十一月三日慶日。なら100年会館に於て盛大に開催された母校の、創立九〇周年記念祝賀式典に参列致しましたが、当日、会場全体に漲る臨場感と共に、独特な雰囲気と厳肅な立体感が充満する会場にも、祝賀という、お目出たいセレモニーの式場に相応しく、参列者一人一人の表情が悦びの笑顔となっていました。また、その表情が慶祝の行事の立会人としての充足感に満ち足りていることにも、

広い会場に開式のファンファーレが高らかに鳴り、九〇周年記念祝賀式典は次に来る、一〇〇周年記念祝賀式典への栄光の第一歩となつて、ここに力強くその足跡を刻み始めました。十一月三日はまさに、母校の新しい、現代高校教育を奈良県全体に実践される、その出発の日になったことについても、奈良県を代表する高校としての存在価値が益々高揚することは、今日参列された諸兄全員が期待していることは間違いありません。

母校に学ぶ新進気鋭の若者

というか、現代を謳歌する生徒諸君が、現代の高校教育の最先端を先取りし、突進される、逞しい姿を今日会場で拝見致しましたが、その純朴な姿こそ、私達が願う、「母校の伝統」であり、「自主創造」の理念に違いないと確信致しました。

母校創立九〇周年記念祝賀式典は、九〇年という、一世紀近い時代の積み重ねに偉大な歴史があり、過去から現代まで、その変化のなかで記録される素晴らしいドラマであると思えます。それぞれの時代と、過ぎ去っていった懐かしい過去の日々を思い、その時代に母校で切磋琢磨された人々の若き日の追憶もまた、素晴らしいドラマとなつて九〇年の長い刻の変遷に繋がっていったのだと思えました。

終りになりましたが、母校の益々の発展を祈願しながら、素晴らしい創立九〇周年記念祝賀式典に参列できた光栄に感謝し、心からお礼を申し上げたいと思います。

奈良散策便り

第五十九回なら散策は、趣を変えて「小動物とふれあう」癒しを目的に、「うだ・アニマルパーク」を計画しました。当日は、見事な秋晴れで集合場所の近鉄榛原駅でメンバーの集合を待ちました。が次々と欠席の電話が入り、最終的に私一人だけの散策となりました。あまりの天気の良いさと、駅で知り合った見知らぬ散策の人たちの流れの中を、少しの時間、散策をさせていただきました。次回は吉野山の予定ですが、又お元気な皆様のお顔が見ればと思います。

つどい会の行事予定

- ・第十九回つどい会総会
平成二十六年
三月二十三日(日)
十一時から十三時の予定
奈良高校セミナーハウスにて
- ・第六十回奈良散策春の部
平成二十五年
四月六日(日)
近鉄吉野山駅 十時集合
「吉野山」桜の吉野、歴史の宝庫

※平成二十六年度 宝相華会総会

平成二十六年
四月十三日(日)
ホテル日航奈良にて開催
されます。
つどい会からも、多数のご参加を。

奈良高宝相華会会報の購読のお願い(予告)

三年に一回、会報『宝相華』の購読のお願いをしておりますが、次回七十号(九月発行予定)をお届けする時、改めてお願いいたしますが、その際はよろしくご協力のほどお願いします。
(編集者 藤原 正義)

ともしび会だより

創立九〇周年を迎えて

大西 純一

(昭42年卒)

創立九〇周年という節目の年を迎え、数々の記念行事が催されました。「創立九〇周年生徒実行委員会」を立ち上げられ、在校生の皆さんが中心となり、学校、育友会、宝相華会が一体となつてのまさに「自主、創造」の建学以来の精神にのつとつたすばらしいものになりました。卒業生として感謝申し上げます。その記念行事としての九月の劇団四季による「ライオンキング」の鑑賞では、非常に良くできた舞台装置とともに舞台衣装もすばらしく、動物達の動きもその表情も、また木や草もすべて俳優さん達で演じられて、まさにアフリカの大地と自然を彷彿させるもので

あり「キャッツ」をしのぐロングランになっているのも納得するところでした。日ごろなかなか舞台鑑賞することも少ないので、このような機会をいただき大変楽しく、また感動して鑑賞させていただきました。そして十一月三日の記念式典は一連の行事のクライマックスとしてふさわしい内容で、活躍する奈高OB展、朝日放送の三代澤康司氏による司会でチェロ、声楽の演奏、スライドでの生徒の皆さんの活躍の紹介、そして日本マイクソフト(株)社長の樋口泰行氏による記念講演、記念応援歌の披露などと、趣向をこらした企画でもりあげて下さり、すばらしい記念式典

となりました。
定時制は昭和二十三年に開設され、平成二十三年春の閉課程まで六十三年間の歴史に幕を閉じましたが、卒業生は一六四一名を数え、それぞれが各分野で活躍され今日にいたっております。今は亡き、木原先生(定時制主事―第十二代学長)が、「君達は働きながら学んでいるのではなく、学びながら働いているのだ」と良く言われておられたのを思い出します。また、平成二十三年度芸術員賞に恩師の笠置侃一先生が選ばれ、平成二十三年春には安曾田豊氏(昭29年卒)、平成二十五年秋には和田晴夫氏(昭31年卒)がそれぞれ旭日小綬章を叙勲されまことに喜ばしい限りです。定時制は閉課程となり新しい「ともしび会」の会員はなくなりましたが、宝相華会の一員として創立九〇周年のキャッチフレーズ「繋ぐ歴史、受け継ぐ伝統、未来に向かう創造力」を心にきざみ、次なる大きな節目の一〇〇周年にむけ、母校のますますの発展を願うものであ

ります。

「合縁奇縁」

保田松美

(昭46年卒)



初恋の人は、中学の同級生、彼は奈高の全日制へ。私は、家庭の事情で定時制に通っていた。

つるべ落しの夕陽が落ちる頃。下校の彼と登校の私。「やあ」と手を挙げる彼。すれ違うだけでしたが、私はドキドキ。会えただけで、天にも昇るようでした。やさしく微笑んでくれる彼の笑顔が、小春日和のように温かく感じられました。

そんな高校時代から四十五年。平成二十三年定時制が閉課程となり、記念碑を建立する事に。その募金の趣意書が

届きました。その知らせにびっくり。早速、募金を送りました。閉課程という寂しさもあって、その翌年、第八回「ともしび会」総会に参加しました。当日、記念碑の建立の話から始まり、竹藪の造成・石を山から運び、設置まで数々のご苦労があった由。

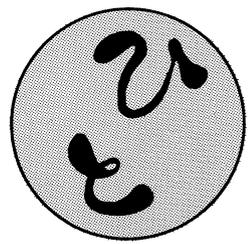
又、大西先輩(昭42年卒)は、今も年二回草取りに行っており、先生方も清掃して下さっているとの事でした。先生方や先輩方のご努力に感謝感謝です。そして、定時制で学んだ先輩方の思い出話や先生方のお話を興味深く聞かせて頂きました。

その後、宴会となり、一番最初にマイクが回って来ました。私は、近鉄奈良駅近くで居酒屋を営んでいる事など、近況を話しました。終つて席に座ると、ハンサムな方が傍へ来られて、「一兆さん。俺・俺」と。一瞬どなたか解らず、戸惑っているとなんと「いつも買物に行っている魚屋の大将(昭41年卒)の木村さんでした。先輩だったとは。一気に距離がなくなりま

した。「ともしび会」に出席しなかつたら、今ほど親しくなる事もなく、ご縁に絆の不思議を感じました。

ところで、東日本震災後「二番絆を結びたい人は誰?」という、ある大学の教授が行なったアンケートでは、一番多かった答えは「家族」が八十%以上だそうです。その八十%の内、実際に絆を結べたと回答した人は二十六%だったらしい。この話をした我が娘は、「なぜ、こんなにも少ないのだろう」と不思議がった。貧しいながらも、家族仲よく暮している娘には、当たり前すぎてピンと来ないのだと思う。そう思うと、実に有難い事だと、しみじみ思いました。

そして「ともしび会」に参加したお陰で、色々な先輩と出会い、ご縁を頂く事が出来ました。私も、このご縁を大切に、先生方や先輩方のような人を魅了する人柄になりたいと思つた。



叙 勲

(平25年 秋 受章)

旭日小綬賞

和田 晴夫氏 (定31年卒)

元・奈良市議

志野 忠司氏 (昭36年卒)

元・日本土地家屋調査士会 連合会副会長

県教育委員長に

花山院弘匡氏 (元教諭)

平成二十五年十二月二十一日から一年間

昭和58年卒 同窓生より

本校の図書館に書籍を約三百五十冊寄贈されましたので報告させていただきます。

奈良市教育委員に

都築 由美さん (昭53年卒)

奈良市は公募により教育委員を選任することになり、アウンサーの都築由美さんを選任した。

訃 報

恩師

野崎 清孝 先生

(平25・1・11 逝去)

宝相華会常任理事

須河 俊治 氏

(高37年卒)

(平25・4 逝去)

宝相華会常任相談役

吉本 仁三 氏

(中13回卒)

(平25・5 逝去)

ご逝去に対し衷心より哀悼の意を表し、心よりご冥福をお祈りします。

